



ジョアン・ミロ  
《女と鳥》

- (うさぎ) これは何を描いたんかわかるかい？
- (きつね) 女と鳥。
- (うさぎ) . . . . . 題名からアプローチしたな、この、きつね。
- (きつね) でもな、どこが女でどこが鳥なんかわからんわ。なんでもうちよっとわかりやすく描かんのやろ？
- (うさぎ) ええ疑問や。座布団1枚！ . . . の4分の1！  
つまりやな、一見難しそうな作品と出会ったときは何でこんな表現をしたんかさぐってみるんが大事なことなんやわ。見てみ。たぶん左側が女のひとで、右下にあるのが鳥やろけど、黒でベタッと塗ってまるで影のようでちょっとこわいし、何かの記号みたいやし、ベタッとしてるようでいてやなあ、奥行きがある。わかってきたやろ。かたちを単純にしたほうが見る人に強いメッセージを発信できることもあるってことを . . . ゴホゴホ。
- (きつね) 素直に見てたのしんだらええのんとちがうの？
- (うさぎ) . . . それもそうやな . . . ゴホゴホ。

ジョアン・ミロ(1893-1983)

スペインのバルセロナで生まれた。ゴッホやセザンヌ、そしてフォーヴィスムの影響を受けた作風から出発した。26歳でパリを訪れてからはもっと最先端の芸術に触れ、シュルレアリスムの運動にも参加した。しかし、ミロはシュルレアリスムに傾倒しながらも文学的な絵画に陥らずに、形と色彩の純粋な調和によって、原始的な幻想に独自の造形性をあたえた(むずかしいな)。1935年から40年ごろのスペイン内乱や戦争中は作風が暗くなったが、この作品のように、1960年代に入ると太く簡潔な少数の線による単純で力強い印象を与える作品へと変化した。